



Title	闇をすくう : Paul Auster, The Invention of Solitude の想起する語り
Author(s)	篠, 直樹
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2022, 56, p. 61-77
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/94865
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

闇をすくう

— Paul Auster, *The Invention of Solitude* の想起する語り

Salvaging The Darkness: Retrospective Narrative in Paul Auster's *The Invention of Solitude*

篠 直 樹

キーワード：Paul Auster/ *The Invention of Solitude*/ ユダヤ系アメリカ文学 (Jewish American literature) / 語り (narrative) / 父子関係 (father-son relationship)

“Perhaps, this is what really counts: to arrive at the core of human feeling, in spite of the evidence.”

— Paul Auster.

はじめに

現代アメリカ文学を代表する Paul Auster (1947-) をユダヤ系アメリカ文学の伝統に連なる作家だと確言することは難しい。Auster の作品はそういったエスニシティのカテゴリーを打ち破り拡張しながら、アメリカ人作家としての地位を不動のものとしたからだ。彼の文学的キャリアはむしろ Don DeLillo (1936-) や Cormac McCarthy (1933-) ら「アメリカ作家」と共に語られて然るべきであり、ユダヤ系と呼ばれる作家たち——年長の Phillip Roth (1933-2018) や下の世代の作家である Jonathan Safran Foer (1977-)、Nicole Krauss (1974-) ら——と比較してエスニシティの提示という点で作風に距離がある。大半の作品において Auster がユダヤ的出自を詳らかに語ることはないのだ。もちろん、Auster をユダヤ系作家として論じる批評は多

数あるがそれらはむしろ例外的な読みの実践としてであって、近年のユダヤ系アメリカ文学研究の到達点といってよい Victoria Aarons 編 *The New Jewish American Literary Studies* (2019) でも Auster に関する記述は二箇所の手短な言及に留められ (63-64, 66-67)、主題的に論じられているわけではない。Auster はまずもってアメリカ人作家として考えられているのだ。

だが、彼の作風の変遷を辿ってみるとユダヤ的であった時期が存在することも事実だ。それは特に初期の二作品、*The Art of Hunger and Other Essays* (1982) と *The Invention of Solitude* (1982) である。前者はエッセイやインタビューが集められたもので、Auster による Franz Kafka (1833-1924) 論や Paul Celan (1920-70) 論、Edmond Jabès (1912-91) との対話を読むことができる。*Hunger* について本稿が注目したい点は、Auster が批評や対談の対象として選ぶ作家の多くがユダヤ系であったという事実だ。*Invention* に目を向けてみると、この作品は作家の自伝的小説、あるいは一風かわったエッセイといえる。*Invention* は二部構成であり、第一部は “Portrait of An Invisible Man” と題された一人称の語り手による父についての省察、第二部は “The Book of Memory” と呼ばれるものでより抽象的な、その殆どが哲学的アフォリズムの集積に近い、エッセイとも自伝ともつかないテキストである¹⁾。そして “Portrait” と “Memory” はユダヤ的主题を共有し照応関係にあるのだが、本稿がいう主題とは「父子関係」である。

ユダヤ系アメリカ文学の伝統において、父子関係は重要なテーマである。柴田元幸が説明するように、ユダヤ教という一神教の文脈における父たる神と子たる人のアナロジーはユダヤ系文学のなかで変奏的に主題化されてきたからだ²⁾ (208-09)。Bernard Malamud (1914-86) の *The Assistant* (1957) はニューヨークに住むユダヤ系移民の店主 Morris Bober とイタリア系移民の店員 Frank Alpine とが疑似的な父子関係を取り結ぶ様を描き、Philip Roth が *Patrimony: A True Story* (1991) において取り上げるのはそのタイトルが示唆するようにユダヤ移民としての晩年の父の姿である。父子関係を作品の中心テーマに据えることがユダヤ系アメリカ作家の特徴であるとするならば、

Invention もまたユダヤ文学の伝統に位置づけられるであろう。

Auster が後の作品で達成する様々なモチーフや主題——偶然性、書くこと、名前への偏執、そして孤独——が *Invention* の中に看取される点は事実だが、それにもまして彼がユダヤ性 (Jewishness) を少なくとも初期の段階では隠そうとせずむしろ前景化していたこと、そしてそれが父子関係としてテキストに表出している点は注目に値する。後に発展し Auster の作家性を特徴づける諸要素が彼のユダヤ的出自に由来し、*Invention* というテキストの中でユダヤ的主题 (父子関係) として先取りされていたのだと仮構することで、作家の文学的特質にアプローチすることが可能となるからだ。

以上の作業仮説のもと、本稿は *Invention* の第一部 “Portrait of An Invisible Man” における語りを、第二部 “The Book of Memory” を参照しつつ分析する。より具体的な本稿の分析対象は、語り手が思考する父の姿と語りを通じた過去への近接という観点からみた、記憶と語り (手) の影響関係である。議論にあたって、まず Marianne Hirsch が提唱する “postmemory” という概念を導入し、語り手が内面化した「父の記憶」の伝達プロセスを考察する。次に、語り手による父についての語りをより詳細に分析し、彼の語りの特質を類型化の試みとして論じたい。そして、本稿が結論づけるのは、ユダヤ系移民としての父の過去／歴史、それに纏わる「闇」と自身への (悪) 影響を語り手が想起的な語りによって弱める点である。

第一節：身体化された過去

近年、ユダヤ系文学、(ポスト) ホロコースト研究、あるいはトラウマ理論の文脈で盛んに議論され利用されてきた概念に Marianne Hirsch の “postmemory” が存在する³⁾。Postmemory とは災害や虐殺に巻き込まれた当事者ではなく、後の世代が自身は未体験のトラウマを反復する事態を指す。*The Generation of Postmemory: Writing and Visual Culture After The Holocaust* (2012) の中で Hirsch は以下のように述べる。

Postmemorial work, I want to suggest — and this is the central point of my argument in this book — strives to reactivate and re-embody more distant political and cultural memorial structures by reinventing them with resonant individual and familial forms of mediation and aesthetic expression. In these ways, less directly affected participants can become engage in the generation of postmemory that can persist even after all participants and even their familial descendants are gone. (33)

非当事者が遠く離れた世代の記憶を再演する行為は当事者／当事者の子孫が死滅しても継続される。ナチスによるホロコースト、旧ユーゴスラビアでの民族浄化といった政治・社会的事件の影響力は計り知れない。所謂ホロコースト第三世代のユダヤ系アメリカ作家に属する Jonathan Safran Foer (1977-) のテクストを分析した論文において、Eric Doise は “It [postmemory] presents trauma as if it were a genetic trait, but passed down through speech, silence, and other acts of those who originally experienced the trauma rather than DNA” (95) と説明する。あたかも “genetic trait” であるかのように伝達されるトラウマは非当事者に身体化された記憶といってよいだろう。本人の意思や意図にかかわらず、否応なくトラウマ的記憶は伝達されるのだ。

以上の postmemory の概観にそって “Portrait” をみると同様の、あるいはそれに近似した事態が起きていることが判明する。語り手は父の死をうけて遺品整理をしながら父について考える。父を語るときに使用される言葉をみていくと、“These tiniest images: incorrigible, lodged in the mud of memory, neither buried nor wholly retrievable” (29)、“There has been a wound, and I realize now that it is very deep” “each day he is there, invading my thoughts” (34) というように、語り手の内面に、あるいは身体に刻みつけられた傷 (a wound) として父の記憶は残り続ける。だが、それは当初明確には言語化されず、あくまで暗喩的描写にとどまる。語り手の行為は先ほど引用した Hirsch の言葉 “reactivate and re-embody more distant political and cultural

memorial structures”に相当すると考えられる。すなわち、父はきわめて平板な“an invisible man” (7) と語り手の内にイメージされながらも父が生きた過去は語り手の思考に侵襲するのだ。

語り手にこうした感覚を与える父の過去は父が生きてきた足跡を辿るうちに明らかとなる。それは父方の一族におけるユダヤ人としてのアメリカでの移民体験や迫害である。当時のユダヤ系移民を取り巻いていた空気感については、語り手が新聞記事を読んだときに感じた点、つまり“*They are a mixture of scandal-mongering and sentimentality, heightened by the fact that the people involved were Jews — and therefore strange, almost by definition — which gives the whole account a leering, condescending tone*” (38) が的確に伝えている。新天地アメリカにあっても、ユダヤ人として生きることは本質的に他者——異物 (“*strange, almost by definition*”) ——として見なされることを意味したのだ。父が直接体験したものについていえば、たとえば彼がユダヤ系であるというだけで会社を解雇されたこと (55) が挙げられるが、父に影響を与えたより強烈でより遠い過去の出来事とは祖母が彼女の夫を殺害したというものである。この事件は語り手が“*A boy cannot live through this kind of thing without being affected by it as a man*”と漏らすように (38)、父に決定的なかたちで (悪) 影響を与えるのだ。事件の詳細についてはのちに触れるが、本節の文脈で重要であるのは家族の過去、一族の闇が語り手に継続的な影響を与えていると推察できることだ。語り手は父とは異なった仕方であるように反復される。語り手のケースに即していえば彼が父を求めること——Derek Rubin はそれを“*hunger, both as the source of yearning and as its object*” (66) と呼ぶ——は繰り返されるのである。そして、語り手と事件との影響関係は間接的ではあるものの、彼は父の死を契機として「闇」と関わり始めるのだ。

第二節：類型化の試み——「解消」をめざして

息子たる語り手が父について語るとき、物語前半部においてはほぼ例外なく否定的なトーンが用いられる。父は“artificial”で“invisible”（16）と形容され、“without appetites”（17）な人物である。また、彼がもっていたとされる世界観は“Uniform, colorless, without depth”（57）であり、平板で即物的な人間として説明される。父親のキャラクターゼーションとして印象的なパラグラフを一つ挙げるならば、以下のものとなるだろう。

My father's capacity for evasion was almost limitless. Because the domain of the other was unreal to him, his incursions into that domain were made with a part of himself he considered to be equally unreal, another self he had trained as an actor to represent him in the empty comedy of the world-at-large. This surrogate self was essentially a tease, a hyperactive child, a fabricator of tall tales. It could not take anything seriously. (16)

父の“capacity for evasion”はほとんど無限である。また、彼がでっちあげる自己像は“the empty comedy”において演じられる。語り手の視点からみた父の像は否定的であり、かつモデリングが施されている。語り手の試みにみてとれるのは、彼が父親を「キャラクター」として提示しようとしていること、つまりは類型化の企図である。語ることで、父は戯画的でフラットなキャラクターに落とし込まれるのだ。そして、語り手が行う類型化、言語によるモデリングによって父は他者化される。「私」は父を対象化し、結果、両者に距離が生じるのである。だが、翻ってみると語り手もまた父と同じく“capacity for evasion”を行使しているともいえるだろう。父を対象化し遠ざけることで、語り手は父に近づいてしまうのだ⁴⁾。

父を言語によって対象化する行為を、語り手が自身の抱える問題（父子関

係における傷（34）を相対化し治療するものだと仮定すればどうであろうか。言い換えると、彼の行為を精神分析的な語りを通した治療行為として捉えてみるということである。自身の抱える問題に対して精神分析的アプローチをとること、つまり、言語でもって患者の抱える問題にコンテキストを施すことには一定の効果が望めそうである。だが、こうした文脈において語り手の行為を考える場合、注意しなければならないのは語り手がおかれた状態である孤独だ。精神分析の教えによれば、臨床においては必ず生身の他者（分析家）が必要とされる。ラカン派の精神分析医であり研究者の松本卓也は分析家と分析主体（患者）のあるべき関係性を次のように述べる。「解釈とは、分析主体に対して、彼の人生や出来事に対する噛み砕いた明瞭な意味を与えることではないし、彼の症状に固定的な意味を与えて安心させることでも決してない。ラカンの考える解釈は『説明による安心』ではなく、むしろ『衝動による動揺』をめざす」（185）。問題や症状は他者と共に語るとき、特に他者の解釈による「衝撃」によって解決に導かれるのであって、孤独な状態で書く行為には生身の他者が介在しない以上、問題は自己の内を循環し続ける結果に終わるだろう。であるならば、——少なくとも精神分析の原則に立てば——語り手に問題の解消は望めそうにない。

だが、精神分析的な語りの理解への迂路を経たうえで強調したいのは、作家 Auster が考える書くことに対する意識である。*Invention* 第二部 “Memory” の中で、A は『千夜一夜物語』における語りの効能について “A story, however, in that it is not a logical argument, breaks down those walls. For it posits the existence of others and allows the listener to come into contact with them — if only in his thoughts” と述べる（162）。特に注意したいセンテンスは、“For it posits the existence of others and allows the listener to come into contact with them — if only in his thoughts” だ。語るという行為には思考の内においてさえも、他者が想定される。完全な独語でさえも立ち聞きされているかもしれないし、個人的な日記もいつか人の目に留まるかもしれない。ならば、言語の使用自体に他者の存在が前提されているといえるだろう。

Austerにとって、書くことや語るとは仮想的な他者との交流をもたらし、自己を致命的状況から逃れさせる。つまり、孤独な状態に身を置く語り手であっても書くことで他者と接触することは可能なのだ。

Auster的な語りの観点にたてば、語るという行為は危機に瀕する自己を延命する。語ることは、そこに生身の他者が居ずとも、危機からの救済の可能性を残すということだ。前節で確認したように、“Portrait”の語り手が抱える問題とは父子関係、さらには父を経由し過去から伝達されたトラウマティックな記憶／闇である。だが、同時に語り手は考える。前節にて言及した箇所を以下に再度引用する。

There has been a wound, and I realize now that it is very deep. Instead of healing me as I thought it would, the act of writing has kept this wound open. At times I have even felt the pain of it concentrated in my right hand, as if each time I picked up the pen and pressed it against the page, my hand were being torn apart. Instead of burying my father for me, these words have kept him alive, perhaps more than ever. (34)

語り手の意図に反して、書くことは傷を広げ、痛みを増大させてしまう。父をイメージし言葉に変換することは、彼にとって“incompatible with language” (34) なのではないかという疑念すら湧いてくる。言語で処理できる範囲を超えてしまうような過去——いみじくも Doise が postmemory を “genetic trait” と遺伝のアナロジーで説明したように——は語り手の深部に回復し得ないレベルの傷を残しているように見える⁵⁾。しかし、回復の手段によって却って傷の痛みが増すジレンマの只中で語り手は “I must enter the absolute darkness of earth” と考え (34)、過去の深みへ飛び込もうと決断するのだ。彼は皮相な方法で父を類型化しキャラクターとして描く行為から踏み出るのである。語り手は過去つまりは、闇の渦中へと飛び込んでいく。

第三節：闇をすくう——追想と鎮魂

語り手が父をどのようにして描写するのか、その方法の変化をみる前に本作の大きなテーマであり、語りが展開される状況である孤独について補足する。Austerにとって孤独は重要なトピックだが、そもそも「孤独である」とはどのような状態を指すのだろうか。19世紀アメリカ文学を中心に文学と孤独の関係性について浩瀚な研究のある古井義昭は*Modernizing Solitude: The Networked Individual in Nineteenth-Century American Literature* (2019) にて“this book stands on a premise that positive values of solitude are found as a result of an individual struggle to combat a painful sense of loneliness.”と述べる⁶⁾ (17)。古井の議論にしたがえば、solitudeとはポジティブな状態であり、対してlonelinessは苦痛を伴う状態である。日本語に置き換えるならば、前者が「孤独」であり、後者は「孤立」に相当するだろう。この区分に則って*Invention*の語り手(“Portrait”/“Memory”の双方)が置かれた状態を考えた場合、彼らは孤独である。語り手は主体的に孤独な状況を選択しているようであるし、孤独であることによって初めて語り手は父や先祖のことを沈思することができるからだ。孤独な状態は*Invention*の語りが展開するための必要条件である。

孤独(solitude)と孤立(loneliness)の違いを確認したうえで、“Portrait”の語り手が置かれた状況を仮説的に整理するならば次のようになるだろう。すなわち、「語り手は自らを孤独な状態に置き、孤立した状況にあった先祖について想起しながら語っている」ということだ。以上の要約で強調したいのは父が孤立した状態にあったという事実である。語り手が父をフラットなキャラクターとして造型し語る点については既に指摘したが、このような類型化は語り手の側からみた生前の父の姿を言葉にしたに過ぎない⁷⁾。父について語るときに語り手は父がいかにしてそうになったのか、その経緯についてはふれなかった。そして、彼の語りが自身の実体験を離れないからこそ、傷

が癒えることはない。語り手は“the absolute darkness of earth” (34) の中に、父方の先祖に纏わる歴史の闇へと飛び込む必要があるのだ。

“Memory”における「旧約聖書」Jonah の解釈は“Portrait”の語り手の行為を考えるにあたって非常に示唆的である。Jonah を飲み込んだ鯨の一般的イメージとは異なり、鯨はJonahを救ったのだとしつつAは自説を展開する。

And when the fish then vomits Jonah onto dry land, Jonah is given back to life, as if the death he had found in the belly of the fish were a preparation for new life, a life that has passed through death, and therefore a life that can at least speak. For death has frightened him into opening his mouth. ‘I cried by reason of mine affliction unto the Lord, and he heard me; out of the belly of hell cried I, and thou heardest my voice.’ In the darkness of the solitude that is death, the tongue is finally loosened, and at the moment it begins to speak, there is an answer. And even if there is no answer, the man has begun to speak. (134)

死に喩えられる鯨の体内は“a preparation for new life”であり、そのような時空間を経由してはじめてJonahは語り始めるのだ。“the darkness of the solitude that is death”というJonahが置かれた状況は通常の時空間的コードが通用しない場＝死後の世界であろう。そのような場にJonahが自ら身を置いたように“Portrait”の語り手は一族にとっての闇と主体的に関わるのだ。実際、祖母が祖父を殺害したという新聞記事を発見した時、「私」は“I read these articles as history. But also as a cave drawing discovered on the inner walls of my own skull”と考える (39)。このような態度でもって過去の記事を読むことは前節でみた父の類型化と著しい対比を成す。語り手は過去を“a cave drawing discovered on the inner walls of my own skull”として、頭蓋に刻印された歴史——身体化された過去——として意識しながら読解するからだ。つまり、語り手は闇としての family history を自己に引きつけて読み、語るの

である。

父の逃避的な姿の背景を回想する語り手は、“this anger was inside him — I believe constantly. Like the house that was well ordered and yet falling apart from within, the man himself was calm, almost supernatural in his imperturbability, and yet prey to a rolling, unstoppable force of fury within” と考える (32)。父が肉親たる「私」に対してすらとる他人行儀な態度、“an unmovable relationship, cut off from each other on opposite sides of a wall” (25) という関係性の背後には父がそうならざるを得ない理由があったということだ。そして、それこそが祖母による祖父の殺害である。

37 ページから 20 頁近くにわたって展開される「事件」の内実と祖母の家族内での立ち位置は父とその兄弟に、そして間接的にはあるが語り手にも大きな影響を及ぼす。新聞第一面の三分の一以上を占める記事において、祖父 Harry Auster は妻に殺害され、当時 9 歳の息子（語り手の父）は現場を目撃していたとされる (39)。語り手が読む記事によれば、夫妻は当時離婚調停の最中で、口論の末、妻が夫を発砲したということだ。この事件をうけて、祖父の弟 Sam Auster は殺された兄の復讐のため義姉（語り手の祖母）に銃撃をくわえるが、弾は外れる。二つの事件は裁判の末、両者共に情状酌量の釈放というかたちで終わりを迎える。しかし、一見うまく収まったかにみえるこの事件の余波が一家に与えた影響は甚大であった。

彼らは絶えざる転居を余儀なくされる。金銭的に余裕のない一家は“nomadism”のように生き、そうした生活は“like living in a quarantine”である (51)。また、頼るべきよすがのない兄弟は互いを模倣し合い、その絆は“a quadruplicate image of solidarity”としてイメージされ、高められた結束は“Like a belief in God, to question it was heresy”とされる (52)。さらに一家において強権をふるう母は兄弟にとって“common loyalty” (53) であり、不文律として作用する。語り手の父は自身がユダヤ人であることに加えて、事件がもたらした精神的／状況的不安に対処するために他の兄弟と自他の区別を あえてつけない。そして、母から継続的に“rule by caprice”をうけ、“the sky

could fall on top of him at any moment” という心もち (54) であっても／或いはそうであるがゆえに、彼が反抗することはない。不安定な世界にあって、父と兄弟の処世術とは不条理に対して寡黙に耐えることであり、そうするために——作品タイトルが示す通り——他者から「不可視 (“invisible”)」であらねばならないのだ。父の息子に対する他人行儀な態度の淵源はその過去にある。

父の人格の背景にある闇にふれ、語り手の父に関する口調は穏やかなものへと変化する。父の生前の行為に賞賛すべき点があるわけではないが、そうするに至った経緯を考える語り手の思考には憐憫の情が見え隠れするのだ。たとえば、外食をしても常に出費を気にする父を評して “His inability to sit still, to make small talk, to ‘relax’” と彼は思い (58)、生前に買ったらしい車のメーターが父の死んだ年齢を指しているのに気づくエピソードには滑稽さが付きまとう (70)。語り手は父の遺していったもの (写真、新聞記事、手紙、車…) について語り、あるべき姿と背景を想像するのだ。

死者が現世に遺したものを “tangible ghosts” あるいは “remnants of thought, of consciousness” (10-11) と表現し、死者の存在を間近に感じていた語り手であったが、物語の後半、すなわち家族の闇を追想し終えた後、遺品に対して抱く感情は “no more than an illusion of intimacy” (73) である。変化という点で興味深いシーンは、父について考え極度の緊張状態に陥りベッドでうなされる語り手が、物語の最終部、穏やかに眠る息子の姿をイメージしながら筆を置く部分であろう (71-73)。遺品に対する語り手の想いと語り手の身体／心理状態をパラレルに考えると、父に対する喪の完了は語り手に身体化した記憶／傷 (34) の治癒と軌を一にしている。当初、死んだはずの父から電話がかかってきたと息子の友達が話すのを聞いた時、語り手は “there’s a ghost at the other end of the line, and he really does want to talk to me.” (13) と考えていた。語り手はある意味で幽霊からの要請に応えたといえるだろう。語り手が自らを孤独な状態に置き、孤立した状態にあった先祖を、そして彼らの生きた闇を追想的に語ることは、父の振る舞いを通して継

承し内面化した自身の苦い記憶を宥めることでもある。死者の鎮魂は語り手の自己に潜む先祖の記憶（幽霊）を語ることで成し遂げられるのだ。

おわりに

以上の分析によって明らかとなったのは、Inventionにおける父子関係という主題の例外的なまでの大きさである。冒頭で述べたように Auster はその後、ユダヤ性をあえて前景化することはほぼなくなる。だが、後に発展する作家的特質を父子関係に——そして、それを起点として過去について遡及的に語ることに——求めるとすれば、ユダヤ性こそが Auster 文学の核にあるといえそうである。もしそうであるならば、Auster の作品を今一度ユダヤ系文学の系譜の中に見定める作業が今後必要となるだろう。

[註]

- 1) “Portrait of An Invisible Man” は一人称の作品であり、語り手は“I”、“Book of Memory”の語り手は“A”（おそらくは Auster を意味する）とそれぞれ記述される。本稿は原則的に、“Portrait”の語り手については「語り手」ないし「私」と、“Memory”の語り手については「Memoryの語り手」ないし「A」と表記する。
- 2) ユダヤ文学として広く考えるならば、そうした主題は Franz Kafka (1883-1924)、Marcel Proust (1871-1922) 等多くのユダヤ系作家の作風に見出せるであろう。
- 3) Hirsch の研究に近いアイデアを示すものとして他に Gabriele Schwab の *Haunting Legacies: Violent Histories and Transgenerational Trauma* (2010) がある。
- 4) 語りによる他者の類型化／距離化は、ジャック・デリダによるレヴィ＝ストロース批判、固有名の暴力性に対する批判と呼応する。「その暴力の可能性の空間として、原＝エクリチュールの暴力、差異の暴力、クラス分けの、また呼称体系の暴力が存在する」(『グラマトロジーについて 上』224)。
- 5) Auster と Edmond Jabès のテキストを砂漠とユダヤ性を鍵語として読解する Josh Cohen は“Auster’s dead father, like Jabès’s God, exceeds the grasp of finite language, haunting the text in his very invisibility to it” (101) と語り手が父から被った傷とその言語化（の不可能性）について述べる。「他者とは究極的には神である」というユダヤ教的テーゼについては、ユダヤ系哲学者として名高いエマニュエル・レヴィ

ナスの論文「時間と他なるもの」(1946)等に顕著である。

- 6) 古井は solitude と loneliness の区別に際して、Philip K. Koch の *Solitude: A Philosophical Encounter* (1994) と Hannah Arendt の *The Origins of Totalitarianism* (1976) の議論に依拠している。
- 7) 生前の父の姿を語り手が類型化するも頓挫する点について、James Peacock は “He craves a singular understanding of his father, but is thwarted by words, which are pluralistic, ambiguous, open to different interpretations” と述べる (26)。その後、語り手が父の背景理解につとめる点を強調する本稿の議論と Peacock の指摘はテキスト理解において共通する。

[引用文献]

- Aarons, Victoria. *The New Jewish American Literary Studies*. Cambridge UP, 2019.
- Arendt, Hannah. *The Origins of Totalitarianism*. Harvest, 1976.
- Auster, Paul. *The Invention of Solitude*. Sun, 1982.
- . *The Art of Hunger and Other Essays*. Menard, 1982.
- Cohen, Josh. “Desertions: Paul Auster, Edmond Jabès, and the Writing of Auschwitz.” *The Journal of the Midwest Modern Language Association*, vol. 33/34, vol. 33 no. 3 -vol. 34 no. 1, Autumn 2000 - Winter 2001, pp. 94-107.
- Doise, Eric. “Active Postmemory: Testimony Fiction, Multiple Perspectives, and Translation in *Everything Is Illuminated*.” *South Central Review*, vol. 32, no. 2, Summer 2015, pp. 93-108.
- Hirsch, Marianne. *The Generation of Postmemory: Writing and Visual Culture after The Holocaust*. Columbia UP, 2012.
- Koch, Philip K. *Solitude: A Philosophical Encounter*. Open Court, 1994.
- Malamud, Bernard. *The Assistant*. Farrar, 1957.
- Peacock, James. *Understanding Paul Auster*. U of South Carolina P, 2010.
- Roth, Philip. *Patrimony: A True Story*. Simon & Schuster, 1991.
- Rubin, Derek. “‘The Hunger Must Be Preserved at All Cost’: A Reading of *The Invention of Solitude*.” *Beyond The Red Notebook: Essays on Paul Auster*, edited by Dennis Barone, U of Pennsylvania P, 1995, pp. 60-70.
- Schwab, Gabriele. *Haunting Legacies: Violent Histories and Transgenerational Trauma*. Columbia UP, 2010.
- Yoshiaki, Furui. *Modernizing Solitude: The Networked Individual in Nineteenth-Century American Literature*. U of Alabama P, 2019.
- 柴田元幸「アメリカ文学とユダヤ人」『ユダヤ学のすべて』沼野充義編、新書館、2009

年、208-09頁。

松本卓也『人はみな妄想する——ジャック・ラカンと鑑別診断の思想』青土社、2015年。

デリダ、ジャック『根源の彼方に——グラマトロジーについて』足立和浩訳、現代思潮新社、1972年。

レヴィナス、エマニュエル「時間と他なるもの」『レヴィナス・コレクション』合田正人編訳、筑摩書房、1999年、231-99頁。

(博士後期課程在籍)

SUMMARY

Salvaging The Darkness:
Retrospective Narrative in Paul Auster's *The Invention of Solitude*

Naoki SHINO

In Paul Auster's *The Invention of Solitude* (1982), the narrators of "Portrait of an Invisible Man" and "The Book of Memory" address the father-son relationship in a retrospective tone. Jewish literary tradition, in general, has placed this relation as a central theme, whereby imitating the model of the Biblical God-human bearings. In Jewish American literature, to name a few, there exist those dealing with the subject as stated above: Bernard Malamud's *The Assistant* (1957) portrays the way Morris Bober, a Jewish shop owner, and Flank Alpine, an Italian clerk, develop the father-son relationship although they have no shared ethnicity. In Philip Roth's *Patrimony: A True Story* (1991), the life of the father of the narrator constitutes the heart of the story. Now, critics see Auster's literary trait less clearly in his Jewish origin than in American, though however, we can say that at least in his early career, Auster not only exhibits but also foregrounds his Jewishness by detailing that relation.

This essay reads "Portrait," the first section of *The Invention*, regarding the father-son relation with a reference to "Memory," the second section, thereby clarifying the narrator's attempt to probe his family history and the secrecy hidden behind his father's personality. First, to discuss an evil influence on both the narrator and his father, this article introduces Marianne Hirsch's critical term, "postmemory," which has been used mainly in the realm of Jewish literary and Holocaust studies. In the context of memory, the term elucidates the narrator's traumatic memory about his father. Second, the act of modeling by the narrator is discussed because by modeling his father, the narrator repeats his father's act, never reaching a solution for him. A final step for discussion is to focus on the narrator's act of salvation into the darkness; that is, the narrator sets out to search for the tragic incident concerning his family and faces the evilness of the past, which has influenced the timeframe of past, present, and future generations. This essay concludes on the textual fact that the narrator salvages ghostly

and solitary figures through his retrospective narrative in his solitude, where the evilness passed down to the narrator is weakened by his effort to tap into the dark past.